表現的遊びの活動を通しての保育

－八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園の実践を中心に－

渡辺一弘

（八戸短期大学）

Ⅰ. 問題の所在

本稿は、表現活動を重視し、その活動が全国的にも高く評価されている八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園（以下第二しののめ幼稚園と略記）の事例を取り上げ、その実践の特質を検討することを目的とする。

1989（平成元）年の幼稚園教育要領改訂に伴い、領域「表現」が設定されて以来、子どもの豊かな表現力を引き出そうとする試みが現場においても重視されている。具体的には、歌や楽器を使った音楽表現の活動、絵画などの造形表現の活動、劇やリトミックなどの音楽的身体表現の活動である。最近の研究でも、保育内容の 5 領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）の中で、特に「表現」に関する研究は多い。今年度（2006 年度）の日本保育学会大会においても、5 領域に関する部会の全 63 件の発表中、発表題目と要旨収録[1]から「表現」領域が中心と考えられる発表は、33 件と過半数に達する。例えば、飯塚朝子「乳児期の音楽表現 4～2 歳児の「歌をうたう」音楽表現と伴奏についての一考察～」、奥美佐子「幼児の描画過程における模倣と創造－模倣に見る子どもの意思と美的経験－」、遠藤晶・花木沙織「幼児の表現遊びのための運動会作品～運動会における発表と日常の保育にいきる題材をめざして～」[2]などであり、その多くは、現場での音楽活動、造形活動、身体活動に着目して、子どもたちに如何に豊かな感性と表現力を身に付けさせるかについての研究である。

このような状況下で、造形表現について、その活動が地域のみならず全国的にも高く評価されている幼稚園が、今回の事例で取り上げる第二しののめ幼稚園である。この幼稚園は、表現活動を重視している幼稚園として地域では知られており、対外的にも平成 12 年度より園児の作品を全国的な展覧会に応募したところ、平成 12 年度－全国教育美術展、世界児童画展に入賞。青森県教育委員会学校賞受賞。平成 13 年度－日本放送協会会長賞受賞、青森県教育長奨励賞受賞。と毎年全国的な賞を受賞するようになり、昨年度から今年にかけても、平成 17 年度－教育美術奨励賞受賞、世界児童画展指導者賞受賞。平成 18 年度－川の日制定 10 周年記念「ぼくらの水辺再発見マップ」奨励賞受賞（東奥日報主催）と数々の賞を受賞しているという[3]。地方の一幼稚園が、造形表現に関する保育活動において、これだけ全国的に評価される理由は何であろうか。また実際にどのような指導を行っているのであろうか。第二しののめ幼稚園の表現活動の実践を検討することは、如何にして子どもたちに豊かな感性と表現力を身に付けさせるか、という問いの一つの指針を示すことができると考える。

そこで本稿では、この第二しののめ幼稚園を事例にして、表現活動重視の特徴をもつこの幼稚園の実践活動の様子を園所蔵資料と園長への聞き取り調査を基に、その活動が全国的に評価される理由を検討することを目的とする。

Ⅱ. 事例研究の対象と方法

（1）対象－八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園の概要

第二しののめ幼稚園は、学校法人光星学院によって、光星学院八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園として、昭和 54 年 4 月に開園し、その後、平成 17 年 4 月に八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園

に改名した。光星学院の付属幼稚園は、これ以外に八戸市内に4園（しののめ幼稚園、多賀台幼稚園、白銀幼稚園、聖アンナ幼稚園）、八戸市郊外の野辺地町に1園（びわの幼稚園）の計5園在り、モンテッソーリ教育を全園共通の基本理念として、それ以外は各園独自の教育方針の下、保育活動を行っている。なお、来年平成19年度には、しののめ幼稚園と白銀幼稚園は統合して、八戸短期大学や地域との連携を強化した新園舎の八戸短期大学付属幼稚園が開園する予定である。第二しののめ幼稚園の建学の精神と教育方針は以下のとおりである。

《建学の精神》

本幼稚園は、学校教育法第77条及び第78条に基づき、幼児を保育し、適切な環境を与えてその心身の発達を助長し、カトリック精神[4]に基づき宗教的情操を涵養することを目的とする（下線は引用者、以下同様）。

《教育方針》

真の幼児教育法や、建学の精神から、まず、幼児が精神的に伸びやかに過ごしつつ幼児それぞれの発達課題を完成できるように援助する。そして、子どもの自主的な遊びを中心としながら、人間間として生きる基礎の形成ができる教育をすすめるために次のような項目を重視する。

①子ども自ら心身共に安心して遊べる環境づくり。
②子ども一人一人の発達や特性に応じて行う援助活動。
③初めに個々の充実があり、その後、集団としての育ちを大切にする。
④一人一人が自立できるように、生活場面での指導。
⑤多様な友達関係を確立する年齢にこだわらない和やかな雰囲気の生活。
⑥子どもの多様な興味・関心・能力に応じた環境の準備。

上記の建学の精神と教育方針のもとに、明るく元気な子、自分の考えをもてる子、心の豊かな子の育成を教育目標に掲げ、日々の保育にあたっている、とのことである。

現在（平成18年度）の教職員数は、園長1名、教諭・講師（非常勤含む）7名、スクールバス運転手3名の計11名で、園長とスクールバス運転手を除いて全て女性である。現在の園児数は、3歳児－20名、4歳児－40名、5歳児－35名、合計95名である。

第二しののめ幼稚園が在る青森県八戸市（人口約25万人）は、太平洋を臨む青森県の南東部に位置し、地域の中核都市である。江戸時代は、八戸藩2万石の城下町として、商業や八戸港の交易によって栄えた。明治以降は水産業を中心に発展し、戦後も優れた漁港施設や背後施設を有する全国屈指の水産都市として、また高度成長期には新産業都市にも指定され、北東北随一の工業都市としても発展している。園の設置地区である八戸市新井田地区は市の南部に位置し、近くには団地や企業の社宅なども多くある住宅地である。なお参考までに、現在八戸市の幼稚園は、第二しののめ幼稚園を含めて全部で27（公立1、私立26）ある。また、八戸市の認可保育園は全部で69（公立4、私立65）あり、保育園が優勢な地域である。

(2) 方法

平成18年8月31、9月26日、12月1日の計3回にわたり、第二しののめ幼稚園への調査を実施した。1回目の調査は、予備調査として、電話で園長に対して保育活動の特徴についての聞き取りを行った。2回目の調査では、訪問調査を実施し、今年度の第二しののめ幼稚園の幼稚園要覧、園だより、園長だより、週案・日案といった園の実際の活動がわかる所蔵資料を閲覧・入手し、その後園長と副園長を中心に改めて聞き取りを行い、実際の活動の様子を観察した。3回目の調査も、訪問調査を実施し、11月に開催された本学会大会での筆者の発表の報告、そこでの質疑応答事項の確認と、新たな資料の閲覧・入手、更に園内の制作物の観察を中心に、再度園長に対して聞き取りを行った。これらを基に、第二しののめ幼稚園の表現活動を重視した特徴を検討して、考察を加える。

Ⅲ. 結果と考察

第二しののめ幼稚園の幼稚園要覧等の園所蔵資料と園長への聞き取り調査の内容を中心にして、園の保育活動の特徴を検討してみよう。先述のとおり、光星学院の付属幼稚園6園はすべてモンテッソーリ教育を全園共通の基本理念として、保育活動を行っている。それ以外の第二しののめ幼稚園の保育活動の特徴としては、「表現活動重視の保育活動の日常化」と「のびのびとした自由さの中での豊かな保育」が挙げられる。

前者は、造形表現の質の向上を目指すもので、園活動の多くは造形的表現の世界ととらえて、

1．発達に即した日常の造形活動を豊かにし、秋の作品展で保護者に訴える。
2．価値の高い展覧会への応募で指導内容の充実を図り、本園の特色とする。

と幼稚園要覧に明記されており、作品展での発表、展覧会への応募といった、しっかりとしたモチベーションをもって意識的な指導がなされていることが分かる[5]。この造形活動を重視する点と、指導について、園長は以下のように述べている。

「私は元小学校の教師で専門は社会と体育なんですが、子どもと教師が一体化して仲良くなれる世界は、絵の世界なんですよ。手にとってできるのは美術なんですよ。具体的にできるのは美術なんですよ。それが良いところです。しかし、小学校でも図工、絵画の指導ができない先生は多いです。幼稚園もそうだと思います。それに図工や絵画の指導に関する意識が低い気がします。子どもの心をつかんだり、引き上げたりすることをいつも考えている先生は、上手な指導ができると思います」[6]

つまり、子どもとのコミュニケーションを図る目的で、具体的に手にとってできる造形活動を手段として保育活動を行っているとのことである。これに関しては、幼稚園要覧にも以下のような記述が見られる。

「絵に力を入れるのは、子どもにとって殊に絵を描く活動が大切だと言うのではなく、絵はいつでもどこでも伝達が可能な、具体性を持っているからで、表現は音楽、体育、絵本、知識等多様」

具体的な指導については、

「私自身、子どもたちに対して造形活動について特別な指導はやりません。またうちの園に、美術専門の先生も居ませんし、そのような教員を特別に採用しようという気もありません」[7]

とのことであり、実際に特別な指導は他の教員も行ってないとのことである[8]。この点については、3回目の調査でも、再度聞き取りしたところ、

「他の園から、お願いされれば、自分から直接指導をすることはあります。しかし、本園の造形活動に関しては、自分が直接何か特別な指導を行うことはありません。すべて担任の先生方に任せています。聞かれたら、できるだけ、特に新任の先生や若い先生に対しては、具体的なアドバイスをするようにはしていますが」[9]

と述べており、一部のアドバイスを除いては、特別な指導をしていないことを強調している。ただし、その代わりに制作した作品の展示に関しての環境設定には十分な配慮をしているとのことで、以下のように述べている。

「普通の幼稚園や小学校には、平面の作品展示スペースが少ないと思います。青森県自体も、幼稚園児の展示物に対する意識は低いと思います。おそらく、そのスペースが暗くなったり、邪魔になったりするからだと思います。しかし、私は、作品の中に子どもをおくというか、作品には子どもが表れると思います。だから、作品の展示には一番力を入れています」[10]

幼稚園要覧によると、園長は十文字学園大学名誉教授の林建造から造形三系論を学び、この造形三系

論を核とした「表現的生き生き幼稚園活動」を目指しているという。園長への聞き取りでも、小学校の教師になってから、実践としてのカリキュラムを学びたいと思い、林を師事したとのこと[11]であった。造形三系論については、幼稚園要覧によると、以下のようなものである。

・第１の系（想像の系）【イメージの系】【おもいの系】
描こうとするものを頭の中でイメージする活動のことで、表象・想像・記憶・知覚・感情・創造等も含むものである。イメージが行動の起点となり、そのイメージが強ければ強い程、意欲が高ければ高い程、後の教師の援助が不要となるものである。

・第２の系（技術の系）【技能・経験の系】
次にそのイメージを具体化するためにクレヨンや絵の具などの材料や用具を選ぶ活動のことである。想像の系が、引き出し、盛り上げるものであるとすれば、技術の系は、唯一教えることができる、あるいは時には教えなければならない系と言える。子どもは描きながら、絶えず自分が画いた絵のイメージ（想像）と照合し、フィードバックしながら修正し（技術）、完成にたどり着く。

・第３の系（伝達の系）【よみとり・共感】
描き上げた絵は、先生や両親や友を伝達の対象とし、自分のイメージが相手に上手く伝わったとき（認められたとき）、初めて表現は完了する。作りっぱなし、描きっ放し、やりっ放しは表現したとは言えない。

これらを行うためには、保育者は常に子どもの意欲を喚起し、子どもの成長の度合いをしっかり見極め、作品は途中でも必ず展示し、他人の目に触れさせ話し合わせなくてはならない、とのことであり、子どもの幼稚園活動は、教師と子どものこのようなやりとりに尽きると考えている、とのことである。特に第３の系については、聞き取りでも強調していた[12]。

後者の「のびのびとした自由さの中での豊かな保育」については、具体的には以下に示す３Ｓ活動というものを行っている。これは、教職員へ対しての指導における一種の手引きのようなものであるが、全体を通して子ども、親に対する触れ合いを強調していることがわかる。

〈３Ｓ活動〉
・　Ｓマイル
のびのびとした子には、暗さは似合わない。子どもの明るさをつくるのは先生の笑顔です。私たちは、常に子どもの前では笑顔を忘れないことである。

・　ＳＡービス
①園でのどんな小さなことでも知りたいという、情報期待へのサービス
②自分の子どもにできるだけ愛情をかけて欲しい、と願う親へのサービス
③子どもの健康、安全に対する不安感除去へのサービス
④幼稚園に期待する、我が子へのより高い教育効果へのサービス
⑤保護者の持つ、利便性（身勝手さもあるが）ことへのサービス
⑥すべて我が身に照らして（親の心、子の心）へのサービス

・　Ｓキンシップ
目をかけ・声かけ・微笑をかけ・手にふれ・身にふれ・心にふれる。一日に一回は落ちこぼすことなく、子どもにその名で呼びかけ、頭をなで、肩を抱いて話し掛けよう。それが心の触れ合いとなり、親愛の情を沸き立たせることとなりましょう。
子どもを愛し見つめ、時々の心がわかり、更に愛しくなった時、私達は教師であることに無上の喜びを感じます。

子どもや保護者との触れ合いを重視する姿勢は、園だより以外に園長自ら編集する園長だよりを月

に2回発行している点などからも伺える。

カリキュラムについては、十文字学園女子短期大学付属幼稚園が考案した、ヒマワリ形の円形カリキュラムを採用している。このカリキュラムは、園全体の年間カリキュラムを元にはしているが、季節のとらえかた、生き物への感じ方、道徳観から、事の善悪まで、3歳と6歳とはまったく違うので、年代ごとのカリキュラムが必要になってくる。円形カリキュラムは、常にその月が頂点にあり、ぐるぐる回すことができなければならないし、修正されることもある、各年齢の連携を密にしたカリキュラムである。表現活動を特に意識したカリキュラムではないが、動的かつ関連性を重視した保育活動を支えていると思われる。

園だよりでは、毎月の活動の中で、共通の活動と各組の活動の欄に、表現的な遊び活動についてのねらいや注意事項が細かく記載してあり、全体の半分程のスペースを占めている。また園長だよりでも、毎号のように表現活動の価値についての記述がある。例えば以下のようなものである。

「先日、りすさんで絵を描いたある子が、まちがえたのと涙ぐんでいました。本当は間違いではないのです。自分が描いたものを間違ったと涙ぐむ気持ちもわかります。気持ちと描かれたものが違って見えたのでしょう。特に絵等の心象表現は、一人一人自分が描いたそのものが素晴らしい答えなのです」[13)]

園長は、毎号このような説明と実際の作品の写真と、その作品についての解説を加えて園長だより発行している。

最後に週案・日案（通常の週日案）については、設定保育（設定活動）のスペースがかなり多く、しかもその活動について気づいたことや留意点についての欄も細かく分けてあり、通常の物よりかなり詳細な形式になっていて、制作に関する指導を徹底させたいという意図が見られる。

Ⅳ. まとめ

以上の検討結果をまとめると、以下の二点が推察できる。

第一に、園長の表現活動重視の教育理念が園中に徹底しており、それが結果として日々の実践活動において、表現活動が特に成果を上げている。

第二に、表現活動自体については具体的な技術指導をほとんど行わず、造形三系論に基づき絵を描くイメージやその展示など、いわゆる環境設定に力を注いでいることが、スムーズに表現活度を行える下地を作っている。

本稿では、表現活動重視の第二しののめ幼稚園の活動方針等について、園所蔵資料の解説と聞き取り調査の内容を中心に概略的な検討に終始した。今後の課題としては、園における日々の具体的な実践活動について迫る必要があるだろう。

【註】

1) 日本保育学会第59回大会準備委員会　2006,『日本保育学会　第59回大会　発表論文集　2006』54-95頁。なおこの冊子は表題には「論文集」とあるが、実際は「要旨収録」と判断できる。
2) 同上
3) 八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園　2006,『平成18年度　幼稚園要覧』、園ホームページより。
4) 第二しののめ幼稚園は、いわゆる一般の「ミッション系」の幼稚園ではない。経営母体の光星学院の創設者ヨゼフ中村由太郎の思いが、付属幼稚園の建学の精神に反映されているに過ぎない。
5) 造形表現以外にも、幼稚園要覧には、身体表現として「縄跳び、かけっこ運動や施設遊具などを十分活用した健康増進と体力の向上」と、音楽表現として「リトミック音楽を重視し、体で覚え、体で感じる音楽の楽しさを計る」の記述がある。
6) 平成18年9月26日、園長への聞き取りより。
7) 同上

8) 平成 18 年 9 月 26 日、副園長への聞き取りより。
9) 平成 18 年 12 月 1 日、園長への聞き取りより。
10) 同上
11) 同上
12) 同上
13) 園長だより平成18年9月25日　ぱれっとNo24より。

【主要参考文献・資料】

日本保育学会第 59 回大会準備委員会　2006,『日本保育学会　第 59 回大会　発表論文集　2006』54-95 頁。
八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園　2006,『平成 18 年度　幼稚園要覧』。
八戸短期大学付属第二しののめ幼稚園所蔵平成 18 年度保育活動資料（週案・日案、園だより等）。

《付記》本稿に関しては、第二しののめ幼稚園の園長藤澤隆先生と副園長の道合康子先生に調査でお世話になった。特に藤澤先生には、聞き取り調査で大変お世話になった。また研究方法に関しては、兵庫教育大学の田中享胤先生から貴重なアドバイスをいただいた、記して謝意を表したい。